日本医史学雑誌第三十六巻第四号
平成二年十月三十日発行

史料との出合い

―歩兵屯所医師取締手塚良仙とその一族―

深瀬泰旦

川崎宿の種痘

手塚良仙という医師の名をはじめて聞いたのは、昭和五十三年六月二十五日のことであった。その前年に神奈川県医師会によって、千二百ページにもおよぶ大部の『神奈川県医師会史』(一)が発刊され、その第一章には鎌倉期から幕末にいたる県域の医療史が載っていた。

医師会を通じて配布されたこの力作に、さっそく眼を通したのはいうまでもない。幕末から明治にかけて横浜を中心とした外国人医師の活躍には、とくに興味をもってページを繰っていった。

神奈川県では明治三年十一月に悪性の天然痘が流行し、多くのいたいけな小児がその生命をおとすという悲惨な状況に見舞われたので、県当局は横浜、神奈川、川崎に種痘病院を設けて、そこで種痘を行うという布達を発令した。その布達の一部に

差向当港医師早矢仕有的松山不苦庵并当港外国医ニウトン儀左ノ日割
横浜……但シ植付場所ノ儀ハ同宿吉原町会所

神奈川……但シ同宿内元本陣石井源左衛門宅ニテ
川崎……但シ同宿元本陣田中兵庫宅
朝四ツ時ヨリ昼後八ツ時迄出席イタシ種痘植付遣

との記事があって、川崎宿の旧田中本陣において種痘が行われるという予定が記されている。この布達が実は『神奈川県史料』第五巻[二]からの引用であることを知って、早速県立川崎図書館におもむきコピーをとってもらった。

この『神奈川県史料』というのは、神奈川県が中央政府の命によって、明治元年から十七年にいたる県の沿革を調査して編纂した稿本で、魚尾に神奈川県の文字をもった美濃版茶野紙に毛筆で書かれており、一行二〇字から二四字、一冊二百丁前後のもの、六三冊からなる。県当局はこの浄書稿本を二部作成して、一部は政府（太政官修史館）に提出し、一部は県庁にとどめおいた。県庁に保管された稿本は大正十二年の関東大震災の際焼失してしまったが、修史館に提出された稿本は内閣記録課へひきつがれ、現在は内閣文庫に所蔵されている。

この史料には県から政府への報告書や、地方への布達や布告のほか、それに関連した書簡などが収録されていて、そのころの県の衛生行政について詳細に知ることができる。しかし県の布達を受けた各地方でこれをどう受けとめたかということは、それぞれの地方に現存する文書をたどってみる他はないわけである。すなわち明治三年十一月の布達を受けた川崎宿ではこの布達通りに実施されたかどうかは、川崎宿関係の文書にあたってみる以外に確かめる術はない。

川崎宿関係の史料といえば、当時は川崎市立産業文化会館に収蔵されていた「森家文書」がもっとも良質の史料を収蔵しているので、早速産文会館の学芸員である三輪修三さんをたづねた。中世近世の日本史が専門である三輪さんは、私の切なる願いに答えて、二、三の文書を目の前に並べてくれた。

一通は溝口（みぞのくち）村の太田東海にあてた神奈川県からの種痘実施命令と、その命令に基づいて計画された接種日程であった。これは残念ながら川崎宿関係の種痘ではなく、川崎市域の在住ではあるが、それまでまったく耳にしたこ

とのない太田東海という医師が行う種痘計画書であった。

他の一通は川崎宿種痘館へ出張してきた神奈川県使部の中山顧謹吾から、川崎宿寄場組合に対して発せられた回状と、この触れ状をうけて五郎左衛門から芳三にあてた、種痘立会人としての勤務を依頼する文書であった。

手塚良仙との出会い

川崎の歴史については市の編纂になる『川崎市史』をはじめ、いくつかの書物が目につくが、読みやすさという点からみると小塚光治さんの『川崎史話』[三]や『やさしい川崎の歴史』[四]がすぐれている。小、中学生向きに書かれたこの『やさしい川崎の歴史』に、次のような記述があることはかねてから承知していた。

一八二八年（文政一一年）三月、オランダ医学者・太田道一（号は良海）が溝の口の人となりました。ときに三〇才。かれは、幕府の最高学府・西洋医学所（いまの東大医学部の前身）で大槻俊斎について学んだ秀才でした。溝の口では種痘を人びとにひろめました。

この太田道一・東海の後裔にあたる太田良海さんが、川崎市役所健康保健組合の診療所に勤務しており、溝口にお住まいであることを知って、梅雨の晴れ間の暑い日曜日に太田さんのお宅をおたづねした。応接室に招じいれられ、父にあたる太田資敬、祖父にあたる東海、さらに曽祖父にあたる道一の事績について詳しく話してくださった。そしてこの道一の妹の嫁ぎ先が、手塚良仙という医師であることを教えていただいた。これこそ、私が手塚良仙の名を耳にした初めであった。

溝口の近郊で種痘を行っていたのは太田さんのところだけで、八代もつづく古くからの医家である岡家は、漢方医のため種痘は行っていない。六日に一度の接種日には人の出入りが多く、門前には屋台が並んで、さながら縁日のような賑わいをみせたという。接種をうけた人は、六日目には太田さんの前にあらわれ、種痘がついたかどうかを確認してもらい、善感した者の膿をとってその日の痘苗とした。そこでこの日を「うみかえしの日」と、人びとは呼んでいたという。

「番号札を渡して、その順番にしたがってうえたり、前回にうえた部位を調べたりしました。長さ一五センチ、幅四センチぐらいの木札で、片面は墨で、片面は朱で番号が書いてあり、〝うみかえしの日〟には朱の面の番号を示して、接種をうけるものと区別しました。私も以前、この番号札を見たことがありますが、今では何処にいってしまいましたか…」と良海さんは遠い昔を懐かしむように話された。

蘭方医太田東海

太田道一は武蔵国橘樹郡下作延村の出身で、百姓のかたわらいつも書物を懐にして、寸暇を惜しんで漢学を学ぶという非常な努力家であった。二十六歳のときに江戸小石川の手塚良仙の門にはいり、漢方と蘭方の折衷医学を学んでいる。また良仙から牛痘接種の手技を学び、のちに痘苗を分けてもらって自宅で牛痘接種を行った。

道一の長子東海については、明治八年にわずか四十七歳で腸チフスにかかって死亡した、ということだけしか知ることができず、東海の二人の男子、資事と資敬についてもあまり多くを知ることはできなかった。

道一の医学の師にあたる手塚良仙については、江戸小石川に住み、漢蘭折衷医であることのほか、道一の妹が後添えとして嫁いでいることをお聞きした。この手塚良仙とはいかなる人物であろうか。『やさしい川崎の歴史』の太田道一は大槻俊斎の弟子だという記述をたよりに、地元川崎の史料ばかりでなく、江戸の蘭学関係の史料にもあたってみるという、両面作戦が必要であるように思われた。

お玉ヶ池種痘所が蘭方医学の普及に果した役割については、古くからその意義が認められ、それに言及した論文は多い。しかし豊富な史料に裏打ちされた構想の確かさにおいて、山崎佐の「お玉ヶ池種痘所」(五)の右にでる論文はない。

安政四年秋下谷練塀小路の大槻俊斎の屋敷に、蘭方医の有力者である伊東玄朴、戸塚静海などが集まって協議し、八月幕府に種痘所開設の許可願いを提出した。翌安政五年正月これが許可になったので、江戸に門戸をはる蘭方医に呼びかけ

て設立資金を募集した。その人名簿が山崎論文に載っている。

箕作阮甫から始まり、竹内玄同、林洞海、大槻俊斎、伊東玄朴と読み進み、その次に千塚良庵、そして一人おいて手塚良斎という名が目にはいった。太田さんのお宅の過去帳に載る手塚良仙と似てはいるが、同一人物ではないようだ。親戚か、一族か、いずれ血縁にあたるものだろう、いつか調べなければなるまいと思いながらなおも読み進んでいくと、終り近くに太田東海という名があるではないか。

種痘の知識とその手技をもっていたということでは、溝口の太田東海と一致するところがあるが、この名簿に載っている八二名—実はこれが八三名であることは後に考証した—はいづれも江戸における錚々たる蘭方医ばかりである。同一人物であってほしいという気持ちと、これほどの事業に参画するのはとうてい無理であろうという否定的な気分とが錯綜した。

過日、太田さんのお宅での話をいくら思い起してみても、お玉ヶ池種痘所のことは一言も触れられていなかった。もし設立資金を拠出した人物であり、このような歴史的事業に参加したことがあるならば、そのことは子孫にもきっと語りつがれているに違いない。それがなかったということは、溝口の太田東海は関係していなかったからではないだろうか…。

ちょうどこの頃小林孝雄さんの『神奈川の夜明け』(六)が出版された。明治初年の自由民権運動について川崎市域の史料を基礎に、運動家の子孫をたづねるなどして、足でまとめた労作である。ここに載る運動家には、本来医師としての職業をもっているものがおり、河合平蔵、阿部容斎などがそれである。引用文献として『当区医務取調書上』があげられており、これが田村家文書におさめられていることを知って、著者の小林さんに手紙を書いて、この史料を見せていただくようお願いした。

小林さんは快くコピーを送ってくださり、この田村家文書が昭和四十三年に発行された『川崎市史』を編纂する際の史料として、マイクロフィルムの形で市役所に保存されているはずだ、ということまで教えてくださった。

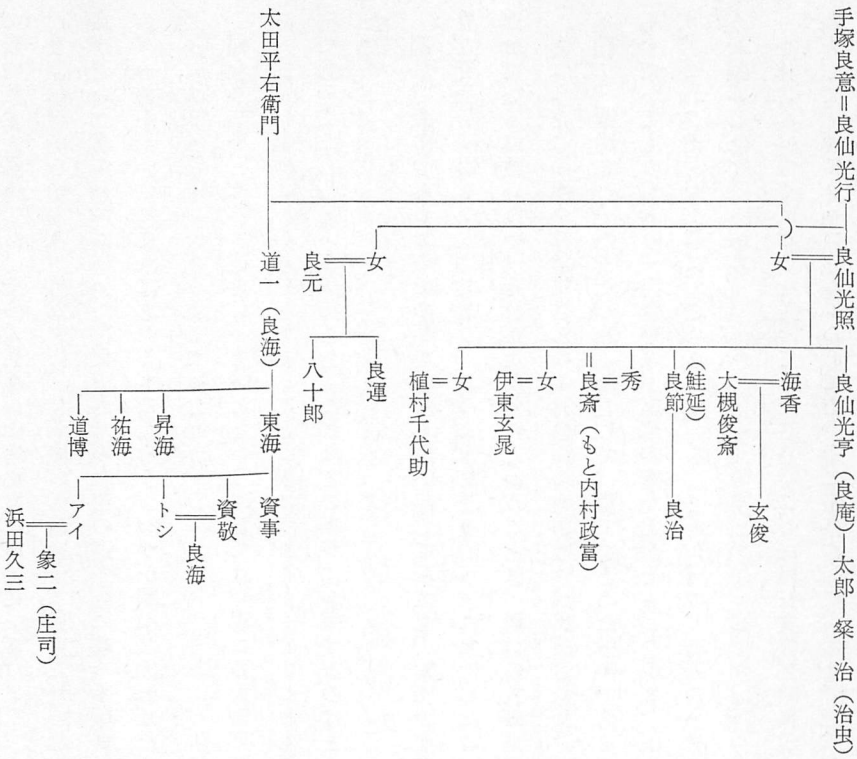

図 1　手塚氏・太田氏系図

『川崎市史』の「あとがき」に、執筆者名とならんで、史料の収拾や原稿の整理をした市役所の職員の名が記されている。その中に、私が赤ちゃんのときからずっと診察している坊やの父親である南一彦さんの名があった。いまは別の職場に移っているが、文書課で保管しているはずだから一つ聞いてあげましょう、と快よく引きうけてくださった。一日おいて電話で、田村家文書は確かに資料目録に載っており、マイクロフィルムにおさめられているが、その部分を探しだすのが一苦労なので一週間ほど余裕をいただきたいとのことであった。

一週間が一〇日たっても何の音沙汰もない。とにかくお任せするより仕方があるまいと半ばあきらめて、別の史料にあたることにした。太田さんのお宅でうかがった手塚良仙という名前を頭にたたきこんで、関係のありそうな書物でも論文でも、目にふ

表 1 手塚良仙概要

字名	生年と没年	概　要
光行	明和6年(1769)～文政12年(1828)	原南陽の門人．小石川三百坂にすみ，『江戸近世医家人名録』にのる内科医
光照	享和元年(1801)～文久2年(1862)	光行の嗣子．大槻俊斎に師であり，義父．その室は武蔵国溝口村の太田平右衛門の娘であり，太田東海の叔母にあたる
光亨	？～明治10年(1877)	光照の長男．はじめ良庵と称し，安政2年に適塾に入門．医学所勤務をへて，歩兵屯所附医師となる．大槻俊斎とは義理の兄弟

れるものすべてにあたってみた。

話は前後するが、混乱をふせぐ意味で現在までの調査によって明らかになった、三名の手塚良仙について簡単にまとめておく（**表一**、**図一**）。

適塾の手塚良庵

まず最初にあたったのが『緒方洪庵伝』[七]である。ここに収録されている「適々斎塾姓名録」には適塾に入門した六三七名の門人がその名を記しているが、その三五九番目に手塚良庵の名を見いだした。安政二年十一月二十五日に入門し、常陸府中藩医手塚良仙の伜だという。

適塾における塾生の勉学ぶりや豪快な遊びの数々は、『福翁自伝』[八]に詳しい。その中でも「遊女の贋手紙」事件として、手塚良庵の名がでてくる。福沢によると

> 此男はある徳川家の藩医の子であるから、親の拝領した葵の紋付を着て、頭は塾中流行の半髪で太刀作の刀を挾してると云う風だから、如何にも見栄があって立派な男であるが、如何にも身持が善くない。

福沢に心をいれかえてもっと勉強するよういわれた良庵は、心機一転約束をまもって勉強に励んだが、それが本心かどうか試されるという場面である。

さらに文久二年洪庵が幕府にめされて大阪から江戸にくだり、奥医師と医学所頭取に就任した際の勤務日誌ともいうべき『勤仕向日記』[九]が載っており、このなかにもいく度か良仙や良斎の名がみえる。

大槻俊斎との関係がさきの『やさしい川崎の歴史』にみられたので、二、三俊斎の伝記にもあたってみた。富士川游の「大槻俊斎先生」[一〇]がある。江戸にでた俊斎がまず川越侯の医官高橋尚斎に入門して家僕となって勉学に励み、のち手塚良仙に師事したとある。師の良仙は、俊斎の懸命の勉学を認めて長崎留学の資金を提供した。俊斎は長崎留学から帰った後、良仙の娘をめとって下谷練塀小路に開業した。良仙と俊斎は師弟の関係だけでなく、義理の親子という関係にまで発展していることが明らかになった。

これに力を得てさらにいくつかの俊斎の伝記を繰ってみた。

俊斎の出身地である宮城県桃生郡赤井村の小学校教諭佐々木侑が、郷里の人びとからも忘れられている俊斎を顕彰しようとして史料を収集してものしたのが『大槻俊斎先生小伝』[一一]である。ここに俊斎が幕府直轄の種痘所の初代頭取に任命されたとき（万延元年十月）に、幕府に提出した親類書が資料として載っている。それには

一、妻松平播磨守医師　手塚良仙娘

とあり、さらに縁者として

一、舅　松平播磨守医師　手塚良仙

一、姑　武州橘樹郡溝口村郷士　太田平右衛門（死）娘（死）

一、小舅　松平播磨守医師　手塚良仙

私舅手塚良仙惣領

一、小舅　松平加賀守医師　鮭延良節

右同人二男

一、小姑　松平播磨守　手塚良仙厄介

手塚良斎妻

右同人娘

などの名があげられている。

この「親類書」から大槻俊斎の妻は手塚良仙光照の娘であり、良仙光照の妻は武蔵国橘樹郡溝口村の太田平右衛門美啓の娘であることが判明した。この太田美啓は太田道一の父である。良仙光照には六人の子女があり、長子は良仙光亨、次子は長女の海香(大槻俊斎の妻)、第三子が次男の良節（加賀藩の鮭延家に養子にはいった）であり、第四子が良斎を婿養子にむかえた次女秀、第五子は伊東玄晁の妻、第六子は植村千代助の妻であることが判明した。手塚良仙光亨、良斎と大槻俊斎、伊東玄晁とは義理の兄弟、太田東海とは義理の従兄弟にあたるわけである。金沢の医史学について造詣の深い津田進三さんの助言によって、金沢図書館から入手することができた『鮭延節蔵　先祖由緒并一類附帳』(一二)によって、これがさらに明確に確かめられた。太田道一の妹は、太田家の過去帳によると安政五年一月一日に没しているので、この「親類書」が書かれた万延元年十一月には死亡していることも一致する。

『解屍会同盟姓字録』に載る手塚家の人びと

大槻俊斎の伝記には、さらに大部の『大槻俊斎』(一三)がある。その五ページに手塚良仙の注記として原南陽の門人録を引用する次の記事が目にとまった。

文化八年辛未七月二八日　手塚良仙名徴字光行　府中侯医官　東武人　四十三歳

文化八年（一八一一）に四十三歳ということは、逆算するとその生年は明和六年（一七六九）となる。文政二年発行の『江戸近世医家人名録』(一四)がある。この名簿の天部に、内科医としての手塚良仙の名がみえ、住居は小石川三百坂と記されている。この良仙は原南陽の門人である手塚良仙光行であることは間違いない。原南陽は古医方の山脇東洋の子東門の弟子であり、賀川流産科も学んでいるので、良仙光行は古医方の流れをくむ医師といってよいであろう。

ここにいう「府中侯」とは水戸藩の支流に当たり、藩祖頼房の四男の頼隆の流れをくむ常陸府中藩（二万石）である。現在の茨城県石岡市に陣屋を構えた。江戸小石川三百坂に上屋敷があった。

ここでもう一人の良仙が明らかになり、これで良仙を名乗る人物は都合三人となった。

近世日本の化学の祖とたかく評価されている川本幸民は、前後三回にわたって火災に見舞われているが、この際の見舞客と到来物を記録した文書が川本裕司の論文に載っている。「火事見舞到来物覚」[一五]と「戊午二月十日夜累災見舞訪来人名録」である。前者は弘化三年（一八四六）の火災、後者は安政五年（一八五八）の火災に際しての記録で、前者の七一名の見舞客の中に「小石川手塚良仙」と「手塚良斎」の名が見える。

川本裕司の付した注によると、

小石川　手塚良仙

良仙はまた良僊。良仙の伴の良庵は安政二年十月適塾入門三五九　文久三年三月一二日良仙は歩兵屯所医師となる。

しかしこの良仙は光照であり、歩兵屯所医師になったのは良仙光亨（良庵）である。手塚良斎については何の注もない。

これはまったく偶然のことであったが、研究室の机の上にさりげなくおかれていた『医談』のページをパラパラめくっていると、第八〇号から第八二号に田口和美の「徳川氏末世に於ける解剖に就いて」[一六]と題する論文を見出した。

この論文の末尾に『解屍会同盟姓字録』がある。幕末に死体を解剖して医学の研鑽に資する目的で結成されたのが「解屍会」である。この姓字録に名を連ねているのは六六名で、お玉ヶ池種痘所設立にあたって拠金した人びとの名もみえる。両名簿に共通する人びとを数えると五一名におよび、解屍会の会員の七七パーセントを占める。

その書式をみると上段に住所を記し、下段に姓名が記されている。主な人びとをひろうと、

両国薬研堀　　林　洞海

種痘館　池田多仲
練塀小路　大槻俊斎
愛宕下薬師小路　石井宗謙
和泉橋通り　伊東玄朴様

など、みななじみ深い人びとである。これらの人びとに交って

下谷ねりべい小路　手塚良斎
小石川三百坂　手塚良庵
玉川溝之口　手塚良斎へ相達すべき事　太田東海

と、目下血眼になって捜し求めている面々の名を見出したときは、譬えようのない喜びにつつまれた。

他の六五名とは異なり太田東海はただ一人江戸をはなれた「玉川溝之口」の住人であって、もし東海に連絡をする必要があるときは、下谷練塀小路にすむ手塚良斎に知らせればよいことを示した、いかにも親密な関係をあらわす表現である。この一点で溝口の太田東海とお玉ヶ池種痘所の拠金者名簿に載る太田東海とは、明らかに同一人物であることを確定できた。さらにこの名簿は単なる会員名簿にとどまらず、腑分けの場所や日時を知らせる際の連絡簿の役割を果していることも明らかである。

明治初年の医師調査

良仙光亨と良斎の関係を明らかにする手がかりとして大きな価値があったのは、山崎文庫に蔵されている手塚良斎の『医学所御用留』(一七)であった。これは一〇四丁の半紙本で、医学所医師であった手塚良斎が、歩兵屯所出役をおおせつけられた文久三年三月十三日から筆をおこし、慶応四年四月までの満五年にわたる歩兵屯所における活動記録である。これによっ

て手塚良斎の略歴が明らかになった。

手塚良斎は信州更級郡の出身で、内村政富と称した。天保十二年江戸にでて、小石川三百坂の手塚良仙光照に入門した。弘化元年には良仙光照の次女秀と結婚して養子縁組をし、手塚姓を名乗るようになった。

一週間ほど余裕をいただきたいといっていた南さんから、田村家文書のコピーが届いたのは、お願いしてからかなり日がたった昭和五十三年もはや暮れようとするところであった。

武蔵国橘樹郡梶ヶ谷村の名主を長年にわたってつとめ、明治維新後は神奈川県第五大区の区長に就任した田村家には、「田村家文書」として多くの古文書が蔵されていた。現在筑波大学日本史研究室の所蔵になっているこの旧田村家文書は、マイクロフィルムにおさめられて川崎市役所が保管しているが、その一部に医師関係の書類として六種の綴りがあり、中でも医師の履歴書をまとめたものに『当区医務取調書上』(一八)(明治六年)と『医者履歴明細書』(一九)(明治八年)がある。この両者に載る医師の数を比較してみると、前者は一八名、後者は一六名で、ほとんどの医師が共通して収録されていることがわかった。

明治新政府は、近代国家としての体裁をととのえる上からも、民生の向上をはかるためにも、種痘の強制接種をはじめとして衛生行政全般にわたって制度の確立を企図したが、まずその根幹となる医師の教育、免許制度の充実をはからなければならなかった。しかしこの当時、政府は全国の病院や医師、あるいは薬舗の状況をなに一つとして把握していない。そこで明治六年六月、全国の府県に命じて管内の医師や薬舗の状況を、さらに七月には病院の設立状況を調査させた。その調査の方法は、府県管下の大小区別に、人口とそこにすむ医師の数とを調査し、医師の履歴を一定の書式にしたがって記入、提出させるものであった。すなわち氏名、年齢からはじまり、医学の修業年数とその内容、開業歴などで、現今二年に一度行われている「医師現状届」より、はるかに詳細なものであった。

このようにして各府県から文部省に集められた履歴書は、明治七年に公布された医制七六ヶ条をはじめ、いろいろな衛

生行政関係法の立案にあたって、基礎資料として力を発揮したことは想像にかたくない。

このようにして文部省に集められた『当区医務取調書上』は、衛生行政が明治八年六月に内務省に移管されたとき、同時に内務省に移されたが、同年七月三日の火災によって舎屋ともどもすべて灰塵に帰してしまった。

そこで内務省は各府県にたいし、再度医師履歴書の提出をもとめ、これが布達されたのは明治八年七月二十五日のことである。これが『医師履歴明細書』にあたる。

太田家の人びと

太田道一は寛政十年（一七九八）に武蔵国橘樹郡下作延村に、郷士太田平右衛門美啓の長男として生まれた。手塚良仙光照の妻となったのは平右衛門の娘であるので、道一とは兄妹の間柄になる。文化十二年十月から文政八年二月まで九年半にわたって、実父から和漢雑方医書を、文政八年三月から同十一年二月まで、小石川三百坂下の「先々代手塚良仙」に医を学んだという。この「先々代」とは、明治六年現在の手塚良仙光亨からかぞえて「先々代」、すなわち祖父の良仙光行であって、道一にとっては義父にあたるわけである。漢蘭折衷内科ほか、香川家産科書、訶倫（ホルン）産科訳書について学び、手術の手ほどきもうけた。また内科については謨斯多（モスト）や扶歇蘭度（フーフェラント）の内科訳書を研究している。

師の良仙光行の推輓によって伊予西条三万石の藩主松平右京大夫の侍医となり、月に六度、溝口村の自宅から青山百人町の屋敷にあがって拝診した。文政十一年三月に故郷下作延村の隣村にあたる溝口村に開業したが、開業の後も下谷練塀小路の大槻俊斎のもとに通学しながらオランダ医学を学び、嘉永二年十二月には早くも牛痘接種法を身につけている。明治八年十二月に死亡した道一の履歴書は、当然のことながら『医師履歴明細書』には載っていない。

道一の長男東海も大槻俊斎の弟子であり、安政四年六月にお玉ヶ池種痘所の設立社中に加わって、尽力したことを知る

ことができた。

嘉永二己酉一一月ヨリ安政四年丁巳五月迄元西洋医学所頭取下谷練塀小路大槻俊斎ニ従ヒ同年六月右医学所社中ニ入というのが履歴書の記載である。「右医学所」というのは安政五年に設立されたお玉ヶ池種痘所であり、「社中ニ入」とは、伊東玄朴、大槻俊斎、箕作阮甫らが種痘所を建設すべく協議した社中をさすものと考えられる。いまだ実在しない種痘所に加わったということは、その社中において医学の修業をしたのではなく、むしろその設立準備のための社中に加わったと考えた方がよいであろう。

道一の四男道博も、始めは父から洋方医学と種痘術を学んだが、安政六年二月に下谷松永町の手塚良斎に入門して医学を学んだことを知り得た。道博ははじめ東京府下の柴崎村、砂川村、小川村において開業していたが、明治八年に兄東海が死亡したのち、溝口村の父のもとに戻ったので『当区医務取調書上』に載っていない。

お玉ヶ池種痘所の開設をめぐって

お玉ヶ池種痘所の設立から始まり、これが東京大学医学部に成長していく過程を記した論文や著書には、次の六種がある。

「江戸種痘所始末」(二〇)、「西洋医学所来歴」(二一)、『箕作阮甫』(二二)(Aグループ)

『伊東玄朴伝』(二三)、「お玉ヶ池種痘所」(五)、『東京大学医学部百年史』(二四)(Bグループ)

これらの論著には設立にあたって拠金した蘭方医の姓名が載っている(「西洋医学所来歴」をのぞく)が、その数を前三書(これをAグループとする)では八三名とし、後三書(これをBグループとする)では八二名としていて、年代順に並べてみると故意か偶然か、前後の二つのグループにわけられる。

『伊東玄朴伝』において、明らかに誤りであると思われる河本幸民(川本が正しい)や千塚良庵(手塚が正しい)など

が、そっくりそのまま「お玉ヶ池種痘所」にひきつがれ、これがまたそのまま『東京大学医学部百年史』に移されている。そのため世に流布している書物は、「拠金者は八二名」と記すものがおおい。その二、三をあげると、れっきとした医史学書である『医学の歴史』(小川鼎三、中公新書)や『日本の医学』(石原明、至文堂)も八二名説をとっており、これらを参考にして書かれた小説の『日本医家伝』(吉村昭、講談社)や『胡蝶の夢』(司馬遼太郎、新潮社)も八二名であったとしている。

あれこれ考察してみると、どうもことの起りは山崎論文にあるように思える。山崎佐は、八三名説をとる『文久航海記』(二五)を「あきらかに誤りであって、八二名がただしい」とその注記に記している。医史学の最高権威者の一人である山崎佐によって八二名説が主張されてしまうと、これを否定することはなかなかむずかしく、先にみたように多くの書物が八二名説を踏襲しているのはやむをえないところであろう。

「江戸種痘所始末」の人名簿は人数はたしかに八三名であるが、戸塚静海の名が二箇所に重複してでていることをまず指摘しておきたい。「江戸種痘所始末」の著者である富士川游が原稿をかく段階で、ほんの数名前に記した人名を重複して書くことは考えられないことである。もちろん原本に重複していたことも考えられない。静海の養子である戸塚静甫をここにおいてみると、まさに『箕作阮甫』に載っている人名簿とピッタリ一致する。

呉秀三は『箕作阮甫』の著述にあたって、大槻俊斎方に残っていた連名帳に基づいて拠金者を記載した、と述べている。「江戸種痘所始末」に載る人名簿も、明記はされていないが大槻家の原本から転写したのではないかと考えられる。しかし印刷のミスによって一方の「静甫」を「静海」としてしまったために、戸塚静海が二名出現する結果になってしまった。

一方『伊東玄朴伝』の著者伊東栄は原本を直接参照せず、「始末」に載っている人名簿を引用し、その際重複している戸塚静海の一方を削除してしまったものと推測される。その結果、戸塚静甫の名が欠落し、総数において一名少い八二名

になってしまったわけである。Bグループの他の二著は、『伊東玄朴伝』からの引用であるため、当然のことながら戸塚静甫の名が脱落してしまった。

歩兵屯所医師としての良仙光亨

この拠金者名簿には、手塚家に関係する人物として、手塚良庵（のちの良仙光亨）と手塚良斎の義兄弟をはじめとして、大槻俊斎や玄俊、太田東海、伊東玄晃などの親類縁者の名がみえる。これらの人物の種痘所における活躍ぶりは緒方洪庵の「勤仕向日記」にも記されている。

この「勤仕向日記」が『緒方洪庵伝』に収録される以前、昭和十七年から十八年にかけて『科学史研究』に連載された。(二六)これらを比較してみると手塚家の人名に納得できない記載があるので、緒方洪庵自筆の原本にあたったところ、すでに良仙を襲名している良庵が、実は良斎の誤りであることを確認した。この時も史料は原本にまでさかのぼることの必要性を、痛いほど思い知らされた。

種痘所に勤務していた手塚良仙光亨は、文久三年三月に新たに設立された歩兵屯所付の医師に任命される。この際の医学所から歩兵屯所への出役医師の選考の様子は、『勤仕向日記』や『医学所御用留』に詳しい。

幕末になって内外の情勢があわただしく変化し、幕府はそれまでの行政組織では対応できなくなったので、安政五年に外交交渉を司る外国奉行を新設したのを手始めとして、兵制の上にも大改革を加えた。安政二年には講武所が武術修練の場として開設され、安政三年には軍艦繰練所、安政六年には軍艦奉行、文久二年には陸軍奉行が新設された。これと同時に歩兵組も組織され、本来旗本の任務である将軍守護の役目を江戸市中の浪人や農民から募集した歩兵組に肩代りさせてしまった。

江戸城の周囲四ヶ所に歩兵屯所をもうけ、その屯所詰めとして医師を常駐させることが幕府によって定められ、医学所医師らに出役が命ぜられた。この歩兵屯所附医師は歩兵組の出動にさいしてはこれに帯同して出陣し、受傷兵の手当や、

病兵の治療にあたる任務をもっていた。これこそわが国における近代軍医の濫觴であり、この組織こそ近代軍医制度の基礎であると規定した。

維新後の良仙光亨

維新後の良仙光亨について触れる。明治新政府は旧幕府の医学所を再興し、一方医学館を種痘館と改めた。明治元年八月十五日に、良仙光亨は桑田立斎らとともに種痘館出張を命ぜられたことが、大病院の『日記』(二七)や『医師姓名』(二八)にみられる。

ついで医学所の産科教授方に就任し、医学校において教鞭をとっていたが、三転して陸軍軍医にすすんだ。この時期は『明治過去帳』(二九)や墓碑銘（この銘は松本順の撰による）によって明治四年とみられる。

手塚良仙　近衛歩兵第二聯隊第二大隊医官陸軍軍医正七位　東京府士族にして明治四年頃張秀則、小林重賢等と一等軍医副（中尉）に任じ六年頃軍医に進み七年正七位に、陸軍本病院第二課員に補し十年西南の役第二旅団中央包帯所附きと為り九月以降陣中に病死す

良仙の維新以後の動静についてはこれによってある程度知ることができ、西南戦争に従軍して陣中で死亡したことを知り得たものの、肝心のその月日を特定することはできなかった。

手塚良仙光亨が西南戦争の陣中で死亡したことをつきとめたので、ついで目をとおしたのが『明治十年西南戦役衛生小史』(三〇)という史料であった。日清、日露の両戦争における衛生史はすでに編纂されているが、西南戦役についての総合的な報告はまだつくられていない。はじめは主要統計の調査を命ぜられただけであったが、ぜひこの際小史をまとめておきたいと思って編纂したのが本書であると、編者の西村文雄はその序文で述べている。

その第六章に傷病者の治験記事があり、はからずもその第六五例として、手塚良仙の発病から死亡にいたる経過が詳し

く述べられている。それによると良仙は明治十年九月二十六日鹿児島において発病した。赤痢であった。九月二十四日城山の総攻撃によって政府軍の勝利におわった二日後の発病とは、なんとも不運なこととしかいいようがない。二十九日に大阪城内の臨時病院に移送され、佐藤進軍医監をはじめ錚々たる軍医たちの治療をうけたが、その手当の甲斐もなく明治十年十月十日午前十一時二十分に死亡した。このとき甥の鮭延良治は軍医試補として大阪陸軍臨時病院に勤務していたので、伯父良仙光亨の治療に加わり、その臨終に立ち会ったかもしれない。

現存する良仙光亨の写真は、明治九年に恩師緒方洪庵の一四回忌に駿河台の緒方邸に集まった際のものが残されている。前年の一三回忌には、八重未亡人を中心に三八名の門下生が集まったが、この年はわずかに二五名を数えるにすぎなかった。陸軍軍医の制服に身をつつんだ良仙光亨は、前列中央に足を投げだしてくつろいだ姿で記念写真におさまっている。(三二～三三)

手塚家の末裔

蛇足ながら、良仙光亨の末裔について触れておく。長男太郎は文久二年正月十六日生まれ。明治十七年七月司法省法学学校を卒業し、検事、判事を歴任して、大正二年四月に長崎控訴院長に就任した。長女の欣は陸軍一等軍医(大尉相当官)大槻靖二に嫁し、次女孝は夭折した。

太郎の子は粲(ゆたか)、そしてその長男、すなわち良仙光亨の曽孫にあたるのが漫画家で有名だった治(治虫)である。治は大正十五年十一月三日の生まれ。大阪大学医学部在学中から漫画の道にはいり、わが国の漫画界に多くの足跡を残して、昨年(一九八九)二月に胃ガンで死亡した。最後の作品ともいえる「陽だまりの樹」は、私の諸論文を軸としてこれに肉づけして完成した、手塚治虫自らのルーツをたどる異色の長編漫画である。

手塚家の墓は巣鴨の摠禅寺(曹洞宗、東京都豊島区巣鴨五―三二―二)にある。本家筋にあたる良仙一家をはじめ、義

兄弟の大槻俊斎も隣合わせでこの寺に眠っている。

おわりに

歴史の研究に欠かすことができないのが史料である。うずもれた史料をどのように発掘してゆくか。またどのような方法でそれにアクセスするか。なかなかむずかしい問題である。いままで世に知られていない史料を自分の手で捜しだし、これを広く世間に公表できたときの喜びは、なにものにも代えがたいものがある。あらたに発掘された史料によって、斬新な見解をまとめたときの楽しみは、まさに研究の醍醐味であろう。

しかし在来から流布されている史料の中にも、あらたな視点に基づいて、異なった眼差しをむけることによって、いままで見過ごされていた事実がかいま見えてくることもある。たえず新鮮な視線を注ぐことによって、あらたな展望が開けることもあろう。

私の史料との出合いの旅においても、綿密な計画に基づいて目的を達成したこともあった。その一方まったく偶然の機会から、おもわぬ史料にめぐりあって思いもかけぬ収穫を手にいれたこともあった。ごくありふれた史料に対しても常に鋭い嗅覚をはたらかせて、新たな事実をかぎわけようとする意欲の必要性を痛感した。

多くの価値ある史料に巡りあえるのも、多くの先輩や朋友をはじめ、同学の士のあたたかい助力があったればこそ、と思っている。史料との出合いも、実は学問と人間を愛する友情の結果なのかもしれない。稿をおわるにあたって、これらの方がたにたいし心からの感謝の意をささげる。

これまでに述べた史料の探索の結果として次の諸論文をまとめることができた。参照していただければ幸いである。

一　「歩兵屯所医師取締手塚良斎と手塚良仙」『日本医史学雑誌』二五巻、二九〇頁、昭和五十四年。

二　「お玉が池種痘所開設をめぐって」『日本歴史』三八八号、七九頁、昭和五十五年。
三　「川崎の蘭方医家太田家の事蹟」『文化かわさき』六号、八〇頁、昭和五十五年。
四　「お玉が池種痘所開設をめぐって　その二―川路聖謨と斎藤源蔵」『日本医史学雑誌』二六巻、四二〇頁、昭和五十五年。
五　「手塚良仙光亨知見補遺」『日本医史学雑誌』二七巻、二一頁、昭和五十六年。
六　「歩兵屯所の医師たち―『医学所御用留』から」『日本医史学雑誌』三一巻、三七二頁、昭和六十年。
七　「歩兵屯所医師取締手塚良斎」『日本医史学雑誌』三一巻、四九〇頁、昭和六十年。

文　献

(一)『神奈川県医師会史』五四頁、昭和五十二年。
(二)『神奈川県史料、第五巻』
(三) 小塚光治『川崎史話、三巻』昭和四十～四十一年。
(四) 小塚光治編『やさしい川崎の歴史』川崎歴史研究会、一九七〇年、一五二頁。
(五) 山崎佐「お玉ヶ池種痘所」『日本医史学雑誌』昭和十九年。
(六) 小林孝雄『神奈川県の夜明け』川崎歴史研究会、一九七八年。
(七) 緒方富雄『緒方洪庵伝（第二版増補版）』岩波書店、一九七七年。
(八) 福沢諭吉『福翁自伝』福沢諭吉全集、第七巻、岩波書店、昭和四十五年、五八頁。
(九) 緒方洪庵「勤仕向日記」緒方富雄『緒方洪庵伝（第二版増補版）』三七〇頁、一九七七年。
(一〇) 富士川游「大槻俊斎先生」『中外医事新報』三八一号五三頁、明治二十九年。
(一一) 佐々木侑『大槻俊斎先生小伝』昭和十八年。
(一二)『鮭延節蔵　先祖由緒并一類附帳　明治三年』金沢市立図書館蔵。
(一三) 青木大輔『大槻俊斎』大槻俊斎先生顕彰会、昭和三十九年、五頁。
(一四) 武井樑涯・稲葉得斎『江戸近世医家人名録（初編）』文政二年、順天堂大学山崎文庫蔵。
(一五) 川本裕司「蘭学者川本幸民伝記論考（続）」『蘭学資料研究会研究報告』一七七号一頁、昭和四十一年（のち川本裕司・中谷一正『川本幸民伝』共立出版、昭和四十六年に収載）。

(一六) 田口和美「徳川氏末世に於ける解剖に就て」『医談』八〇号一頁、八一号一頁、八二号一頁、明治三十六年。
(一七) 手塚良斎『医学所御用留』順天堂大学山崎文庫蔵。
(一八) 『当区医務取調書上』明治六年、田村家文書、川崎市蔵。
(一九) 『医師履歴明細書』明治八年、田村家文書、川崎市蔵。
(二〇) 「江戸種痘所始末」『中外医事新報』三八八号三八頁、明治二十九年。
(二一) 「西洋医学所来歴」『刀圭新報』四巻一号一五頁、大正元年。
(二二) 呉秀三『箕作阮甫』思文閣出版、大正三年（昭和四十六年復刻版）。
(二三) 伊東栄『伊東玄朴伝』玄文社、大正五年。
(二四) 『東京大学医学部百年史』東京大学出版会、昭和四十二年、三頁。
(二五) 三浦義彰『文久航海記』冬至書房、昭和十六年、一七頁。
(二六) 緒方富雄「勤仕向日記」『科学史研究』三～六号、昭和十八年。
(二七) 「日記―明治初年医史料―」五二頁、『日本医史学雑誌』別刷昭和十八年（昭和五十四年復刻版）。
(二八) 「大病院医学所種痘所楳毒院医師姓名―明治初年医史料―一七頁、『日本医史学雑誌』別刷昭和十八年(昭和五十四年復刻版)。
(二九) 大槻四郎『明治過去帳　新訂版』東京美術、昭和四十六年、一一三頁。
(三〇) 西村文雄『明治十年西南戦役衛生小史』陸軍軍医団、大正元年、一八九頁。
(三一) 石河幹明『福沢諭吉伝』第一巻、岩波書店、一九八一年、一四五頁。
(三二) 緒方次郎「東京に在りし適々斎塾」『日本医史学雑誌』一三二二号三八五頁、昭和十八年。
(三三) 緒方次郎「東京に在りし適々斎塾」『医譚』一七号四五頁、昭和十九年。

（順天堂大学医史学研究室・東京慈恵会医科大学医史学）